同窓生シリーズ ㊼

第27回生　平岡　啓氏

1982年　上智大学法学部卒
同年　日本経済新聞社入社
社会部、西部支社（博多）等を経て
現在社会部デスク

新宿高校ラグビー部ができてから、最も弱いといわれた代のキャプテンだった。

当時、上と下の代には都でベスト8をうかがうチームも出ていたのに、僕らのチームは練習試合すら一つも勝てず、冬の戸山高校との合同練習は、物笑いのタネにされ情けない思いをした。

春の関東大会の予選も早々に負け、部員の士気が下がるだけなので、他校との練習試合は一切中止。一勝するチャンスは戸山戦しかなくなり、しかも勝つとすれば、冬の合同練習でこちらを見下してくる相手の油断につけ込むしかない。相手を慌てさせるためにポジションを冬と全部入れ替えてしまおうということになった。

ロックをセンターに、フッカーをナンバーエイトに、ウイングをロックに……。嫌気がさしてやめるのもいて部員は十四人。一人は新入生の頑丈そうなのを入れる。はったりのつもりだったけれど練習していると、結構手応えがあった。

二カ月後。話は出来過ぎなのだが、油断して、慌てた戸山に6対0で勝ってしまった。戸山のキャプテンに「油断したろ」と言うと、「ああ」と力なく答えた時は、妙な奇策を仕掛けて悪いことをしたなと思った。

顧問の先生は少し興奮して試合を締めくくった。「夢だと思った。ゲーム半ばから君たちが奇跡を起こすと確信した。ありがとう」。教師からの賛辞に縁のなかった高校生活で唯一のほめ言葉だった。

入学したのは学校群制度が始まって六、七年たった頃。合格発表まで新宿・駒場のどちらの高校に入るかわからなかった。

高校入学直前に世田谷区に越してきたので、学区内に知り合いもなく、どの学校の事情も全く分からなかったので、どちらに決まっても「何かの縁だ」というぐらいに考えていた。そして縁を結んだ新宿高校はとても気に入った。

学校は生徒を大人並みに扱ってくれたけれども、それに応えられるほど大人でもなく、賢くもなかった。

ラグビーと、二号でつぶれた同人誌のまね事みたいな雑誌作りに夢中になるほかは、授業を抜け出し屋上でひっくり返り、喫茶店でたむろし、パチンコと雀荘で小遣いを使い果たしていた。

一九七六年春、ロッキード事件という戦後最大の疑獄事件の捜査が進展中だった。主役の一人、右翼の大立者が自宅近くの屋敷に住んでいた。

その脇の路上には毎日昼も夜も、十数台近く黒塗りのハイヤーが並んだ。朝になるとYシャツ姿にネクタイをゆるめた大勢の男が押し黙ったまま車から降り、近くの中学校の校庭で顔を洗っていた。

初めて見た現場の記者の姿は頭の片隅に長く残った。その年、高校を卒業。自分がロッキード裁判にかかわり、最高裁判決を報じることになるとは、その時は夢にも思わなかった。